

吉沢八景選定プロジェクトからみる都市近郊の里地里山地域における子ども達の景観認識

Landscape perception of the children who live in the Satoyama-area which locate in the city suburbs based on "Kisawa-Hakkei selecting project"

小島 周作* 服部 勉** 田中 伸彦*** 町田 怜子**** 麻生 恵**

Shusaku KOJIMA Tsutomu HATTORI Nobuhiko TANAKA Reiko MACHIDA Megumi ASO

Abstract: The purpose of this study is to investigate the landscape perception of children who live in Satoyama area which locate in city suburb, where there are a few landscape perception researches have done. The research resource is recommended landscape and recommended reason of local school students, which was selected through "Kisawa-Hakkei selecting project" in Kisawa district, Hiratsuka city. We extract viewed elements and viewing spots from recommended landscape, and landscape perception types from recommend reasons. As a result, three trends were found. (1)The landscape of Satoyama and farmland were almost not selected, even though the Satoyama can be seen from many spots and there are a lot of farmlands in Kisawa district.(2)The children select landscape as seen from the place which is relevant to their living environment.(3)There are not only a landscape perception type that epithet the viewing spots like "beautiful", but also various perception types, for example, the type that express their own mentality like "become cheerful (by seeing the recommend landscape)".

Keywords: landscape perception, children, satoyama-area in city suburbs, Kisawa Hakkei

キーワード：景観認識，子ども，都市近郊の里地里山，吉沢八景

1. 研究の背景と目的

地域固有の景観や風土を重視した、住民主体の景観まちづくりが各地で近年活発化している。特に、都市近郊の里地里山地域においては、農村部と市街部が混在し、様々な属性の人々が居住しているため、景観まちづくりを効果的に推進する上では、属性毎に景観認識を詳細に把握する必要があると考えられる。その状況を受けて、研究面では、対象者の自由記述回答等のテキストを用いて景観認識を探る研究手法が、大石ら¹⁾や大平ら²⁾などによって蓄積されてきた。都市近郊の里地里山地域を対象とした既往研究としては、松島ら³⁾の大人を対象とした研究が挙げられ、地元住民と移住住民の景観認識の差異を明らかにしている。しかし、景観まちづくりの促進のためには、都市近郊の里地里山地域の担い手として期待される子ども達の景観認識の把握も必要であると考えられる。

また、近年都市近郊の里地里山では、農業従事者の減少に伴い、市民による保全活動が主流となっている⁴⁾。そのため、都市近郊の里地里山地域に居住する非農家を含む子ども達の景観認識を把握することが、今後の里地里山保全活動への理解と参加を促す面からも重要であると考えられる。

以上の「景観まちづくり」、「里地里山保全」という2つの観点における子ども達の景観認識に関する既往研究を整理すると、まず鄂ら⁵⁾は、地域ごとに子ども達の景観認識特性に違いがあることを指摘している。また曲田⁶⁾は、伝統的建築物群が行む市街地を対象に評価尺度を用いて検証し、服部ら⁷⁾は、都市部を対象に自由記述回答を用いて調査を行っている。しかし、里地里山に着目して、景観まちづくりに繋がる子ども達の景観認識を探求した既往研究はあまり多くない。

そこで本研究では、後述する「吉沢八景選定プロジェクト」において、都市近郊の里地里山地域に居住する小学5年生～中学2年生の児童・生徒（以下；子ども達）が応募した、吉沢八景に推薦したい景観とその推薦理由を分析することで、都市近郊の里地里山地域における子ども達の景観認識を把握することを目的とする。

なお、木下ら⁸⁾は、農村地域の子ども達の風景描写に着目し、自己形成期に基盤となる地域の景観形成に子ども達に関わることの重要性を指摘している。以上から、同じく都市近郊の里地里山地域における景観形成行為である「吉沢八景選定プロジェクト」の中で、子ども達が推薦した景観やその推薦理由は、景観まちづくりと里地里山保全の両面で、今後のあり方を探る分析材料として有用であると考えた。

また、寺本⁹⁾は、農村地域の子ども達の手書き地図に着目し、知覚環境発達モデルについて考察している。その中で、小学5年生程度で行動圏よりもやや広い範囲を知覚でき、中学2年生程度で可視領域全体を知覚できると指摘している。行動圏と近似する小学校区が、そのまま吉沢八景の選定範囲であるため、小学5年生～中学2年生を対象に分析することは、妥当であると判断した。

2. 吉沢地区及び「吉沢八景選定プロジェクト」

吉沢地区は、神奈川県平塚市の西部丘陵地東端に位置し、市街地に隣接する、典型的な都市近郊の里地里山地域である。丘陵地特有の農村風景が広がる「上吉沢」「中吉沢」「下吉沢」と、地区内に開発造成された新興住宅地である「めぐみが丘」の4つの自治会区で構成されており、農業従事者と一般住民が混住している。

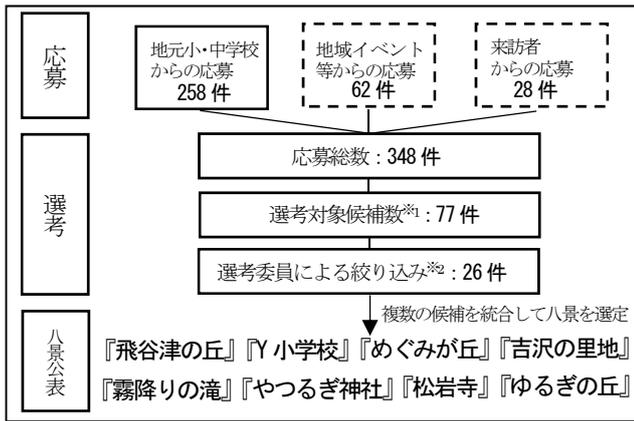
地区住民で構成された、同地区の里地里山（通称；ゆるぎ地区）の活性化を目的とする市民団体「湘南ひらつか・ゆるぎ地区活性化に向けた協議会」（以下；協議会）は、2014年から約2年間、連携協定を結ぶ平塚市、ゆるぎ地区内に土地を所有するデベロッパーのX社、東京農業大学・東海大学の協働のもと、「吉沢八景選定プロジェクト」（以下；プロジェクト）を推進し、2015年11月に吉沢八景を選定した。このプロジェクトは、地区内外問わず様々な人々を対象とした市民公募型の「八景の選定」事業である。近年全国各地で、市民公募型の「八景の選定」が実施されている中で¹⁰⁾、本プロジェクトは、八景の選定対象範囲が小学校区単位と狭いのが特徴である（約4.8km²）。本研究では、「地元の子ども達が身

*東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻

**東京農業大学地域環境科学部造園科学科

***東海大学観光学部観光学科

****東京農業大学地域環境科学部



※1: 同一の応募を一つの候補として再集計
 ※2: 選考委員のアンケート調査から選考対象候補を点数化し上位候補を抽出した

図-1 吉沢八景選定プロジェクトの選定プロセス

近な生活景観の中から選んだ、八景に相応しいと判断した景観を、以下「応募景観」と記すこととする。

また、プロジェクトの選定プロセスを図-1に示す。後述する地元小・中学校からの応募も含め、地区内外から348件の応募が集まり、協議会役員を中心とした選考委員会によってその中から人気の高い複数の候補を統合する形で八景が選定された。

3. 地元小学校の児童及び地元中学校の生徒からの応募

協議会は、地区内のY小学校と、地区に近接し地区内から多くの生徒が登校するZ中学校に、プロジェクトへの協力を依頼し、Y小学校の小学5・6年生の児童と、Z中学校の中学1・2年生の生徒（共に平成27年度在籍時の児童・生徒）が応募することになった。応募は、平成27年3月下旬から4月上旬までの春休みの期間の宿題として行われた。まず、各クラス担任を通じて八景に関する基本的な説明がされた後に、協議会が用意した応募用紙が子ども達に配布された。応募用紙には、「素敵な風景」や「未来に残したい風景」等が例として挙げられたが、特に応募景観の応募基準は限定せず、子ども達自身の基準で八景を応募するように設定された。記述事項は、「居住地区」、「学年」、「視点場と視対象」、「推薦理由」、「おすすめの季節」、「写真」の6点である。ただし、「おすすめの季節」、「写真」に関しては、任意による記述を求めた。春休み終了後の最初の登校日に、応募用紙が回収され、結果、Y小学校の児童からは182件、Z中学校の生徒からは76件と、両校合わせて258件の応募を集めた。なお、協議会側からの説明では、1人が数件応募するケースがみられたという。しかしながら、匿名制であったため応募人数は不明であった。また、子ども達の大半は、新興住宅地である「めぐみが丘」在住であることを留記しておく。

4. 研究方法

(1) 応募景観の把握

応募用紙の記述事項の「視点場と視対象」の記述から、各応募景観の視点場と視対象を特定した。集計の際、場所が近接している

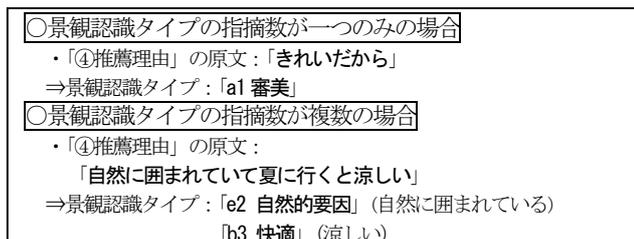


図-2 景観認識タイプの分類例

視点場や表現が似通った視対象については統合した。また、曖昧な表現などで、具体的な視点場と視対象が特定できなかった応募は研究の対象から除外した。

応募景観は、「視点場と視対象が明確に分類されるタイプ」と、「視点場と視対象が一体的な関係であるタイプ」の2タイプに分けられた。そこで、篠原¹⁾の定義を参考とし、前者のタイプを「シーン景観」、後者のタイプを「場の景観」と定義し、別途に集計して分析を行った。例えば、「視点場と視対象」の記述が『Y小学校から見た富士山』の場合、「シーン景観」と分類し、視点場がY小学校、視対象が富士山となる。また、『霧降りの滝の風景』のような記述の場合は、「場の景観」と分類してから集計した。

(2) 景観認識タイプの分類・集計

本研究では、子ども達が応募景観に対してどのような認識をし、どのような意図で応募したのかを明らかにするため、既往研究¹⁾²⁾³⁾の手法を参考とし、応募用紙の記述事項の「推薦理由」の記述を、いくつかの景観認識タイプに分けて集計した。一つの応募景観から複数の景観認識タイプが存在した場合は、それぞれを1つの景観認識タイプとして重複して集計した。

図-2に、景観認識タイプの分類例を示す。

5. 結果及び考察

(1) 応募景観の把握

258件の応募景観から、「シーン景観」は120件、「場の景観」は65件であった。残りの73件は、曖昧な表現等で景観の特定が出来なかった。

120件の「シーン景観」において、指摘された視対象とその出現数、及びその割合を表-1に示す。一つの視点場から複数の視対象を挙げる応募景観の場合は、それぞれを別途に集計したため、全視対象の合計出現数は160回であった。その内、「桜」が47回(29.3%)、「富士山」が34回(21.3%)、「Y小学校」が32回(20.0%)であり、3つの視対象の合計が160回中113回と全体の約70%を占めていた。「桜」や「富士山」は見られる時期が限られ、一般社会からも普遍的に認識されるものであることから、出現数が多いことが考えられる。「Y小学校」については、校舎の赤い屋根が特徴的であり、地区のランドマークとして認識されやすいデザインであることが、出現数の多さに繋がったと考えられる。

単純集計した、「シーン景観」の主な視点場を地図に記した図-3を見てみると、「Y小学校周辺」が40件(33.3%)、「Y小学校」が33件(27.5%)であり、120件中73件と全体の約60%を占めていた。また、多くの子ども達が居住するめぐみが丘に位置する視点場からの応募景観が合わせて120件中14件と約12%を占めていた(図-3に図示されていない2件未満の応募景観も含む)。これらの結果から、子ども達は自身の生活環境と関わり深い場所からの景観を重視することが示唆された。

「シーン景観」の視対象と視点場の組み合わせの上位5パターンの回数を表-2に示した。これより、普遍的に認識される視対象やランドマークとして認識されやすい視対象と、視点場として生活環境と密接な関係にある場所に、強い関連性があることが伺えた。特にY小学校は、子ども達にとって「見る・見られる」場所として重要であることが判明した。

表-3に単純集計した「場の景観」の応募件数を示し、その位置

表-1 「シーン景観」の視対象とその出現数

吉沢地区内に位置する視対象(出現数)		吉沢地区外に位置する視対象(出現数)	
[里山]	「ゆるぎの里山」(6)	[街並み]	「平塚市街」(3)、「日向岡」(2)
[小学校]	「Y小学校」(32)	[山・丘]	「富士山」(34)、「大山」(8)
[居住地]	「めぐみが丘」(4)		「湘南平」(3)
[花]	「桜」(47)、「つつじ」(2)	海岸方面	「海」(2)、「江の島」(4)
	[その他]:(7)	[太陽]	「夕日」(3)、「初日の出」(3)

※全視対象の合計出現数: 160回 ※ 0内の数字は各視対象の出現数を示す
 ※出現数が1回以下の視対象は、[その他]に集計した

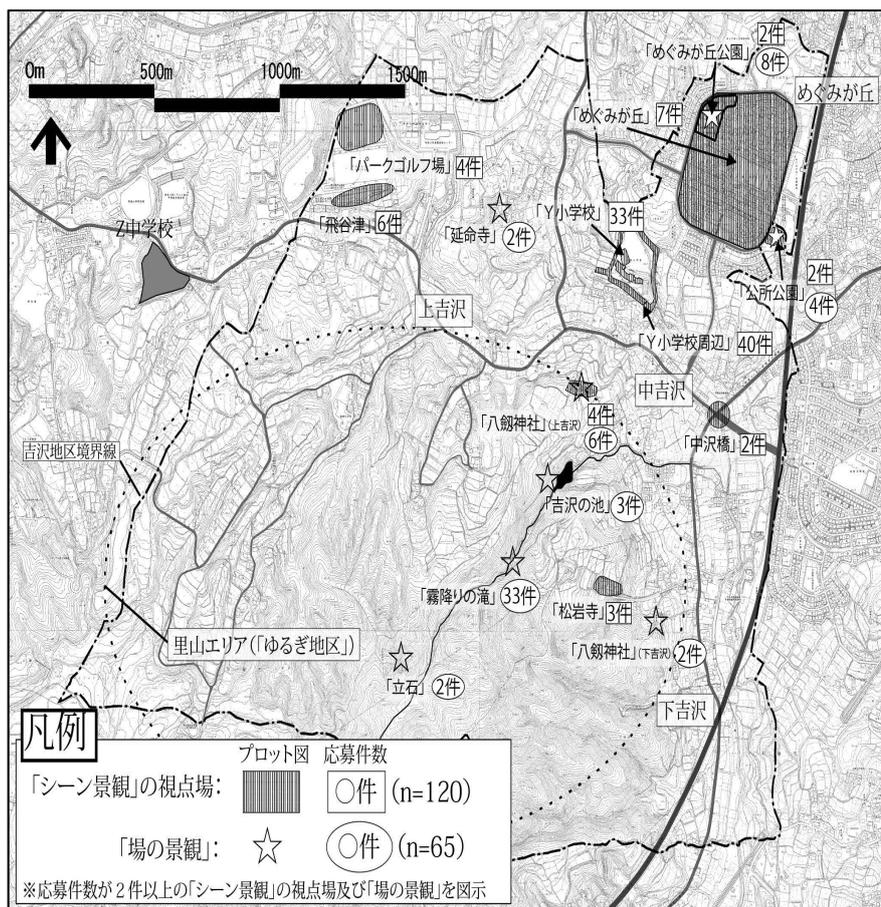


図-3 「シーン景観」の視点場と「場の景観」の分布図

を図-3に図示した。「場の景観」の中で最も多かったのが「霧降りの滝」であり、65件中33件と全体の約50%を占めていた。「霧降りの滝」は平塚市が1982年に選定した平塚八景に選ばれていることを考慮すると、吉沢地区の象徴的な景観として、子ども達から重視されていることが伺える。次点に8件(12.3%)の「めぐみが丘公園」が続き、4件(6.2%)の「公所公園」と合わせて65件中12件(18.5%)が、めぐみが丘内にある公園自体の景観であり、生活環境と密接な関係にある場所を重視する傾向が改めて強調された。また、6件(9.2%)の「八剣神社」(上吉沢)など社寺の応募景観が合わせて65件中10件と全体の15%を占めていた。

他方、「シーン景観」において、畑などの農地が地区内に多く点在しながら、視対象として挙げたのは1件(0.8%)のみで、地区全体の1/3の面積を占める「ゆるぎの里山」の場合は6件(5.0%)だけであった。以上から、子ども達は生活景観の中から八景に相応しいと判断した景観を選ぶ際、「富士山」や「霧降りの滝」などの景観を重要視し、里地里山や農業に対する関心は、相対的に低いことが示唆された。

(2) 景観認識タイプの分類・把握

185件の有効応募景観の推薦理由から、6種類22小タイプの景観認識タイプに分類した。各景観認識タイプと、「シーン景観」の視対象、「場の景観」とのクロス集計を表-4に示す。「シーン景観」の視対象において、一つの景観認識タイプが複数の視対象に対して言及している場合は、別途に集計した。例えば推薦理由に「きれいだから」と書かれ、その視対象が「富士山」と「桜」であった場合、表-4の表側の「a1 審美」と、表頭の「富士山」と「桜」の欄それぞれに「1」(指摘回数)とカウントした。指摘回数の合計は547回であった。

景観認識タイプは、応募景観を見た際に得られた視覚情報に対

表-2 「シーン景観」の視点場と視対象の組み合わせ上位5パターン

視対象	視点場	回数
Y小学校	Y小学校周辺	26
桜	Y小学校	22
桜	Y小学校周辺	17
富士山	Y小学校周辺	16
富士山	Y小学校	10

※各視対象の出現数…
 ・「Y小学校」: 32回
 ・「桜」: 47回
 ・「富士山」: 34回
 ※各視点場の合計応募件数…
 ・「Y小学校」: 33件
 ・「Y小学校周辺」: 40件

表-3 「場の景観」の応募件数

分類	場の景観	自治会区	応募件数
公園	公所公園	めぐみが丘	4
	めぐみが丘公園	めぐみが丘	8
社寺	延命寺	上吉沢	2
	八剣神社(上吉沢)	上吉沢	6
	八剣神社(下吉沢)	下吉沢	2
水系	霧降りの滝	中吉沢	33
	吉沢の池	中吉沢	3
石碑	立石	下吉沢	2
	その他		5

※「場の景観」の合計応募件数: 65件
 ※応募件数が1件以下の「場の景観」はその他に集計した

して記した185回(33.8%)の「A 見え方」、応募者の心象を記した149回(27.2%)の「B 心象」の2種類の指摘が多かった。とりわけ「a1 審美」の指摘回数が145回(26.5%)と小タイプの中で際立っていた。15回(2.7%)の「C 地域紹介」は、今後見込まれる来訪者を意識する上で、地区内のおすすめの景観を積極的に紹介するものである。応募景観の応募基準は子ども達自身に委ねられているが、「C 地域紹介」のみは対外的なものであり、「八景の選定」事業ならではの景観認識であることが考えられる。15回(2.7%)の「D 音」のような指摘も散見され、視覚のみならず聴覚も景観認識に影響を与えることが示唆された。「E 事象」は、「e1 視覚的要因」「e2 自然的要因」「e3 社会的要因」に細分され、何れもが、応募景観の状態・状況を補足的に説明するために記載されていたもので、合計で150回(27.4%)と指摘回数が多くなっている(図-2参照)。27回(4.9%)の「F 経験・習慣」の指摘から、応募者の過去や現在の生活スタイルも景観認識に影響を与えることが示唆され、既往研究⁸⁾の成果を再確認する形となった。

景観認識タイプと「シーン景観」の視対象の関係をみてみると、元々視対象の出現数が多い「Y小学校」「桜」「富士山」からは多くの小タイプが指摘され、景観認識の多様性が読み取れる。またこの3つの視対象から、(1)「a1 審美」の指摘回数が20回以上あり、密接な関係にある、(2)「富士山が見える」「桜が咲いている」などの「E 事象」の指摘も多く、存在自体が重要である、(3)「C 地域紹介」の指摘も比較的多く、来訪者にも見て欲しい視対象である、の3点が示唆された。さらに「Y小学校」は、7回(1.3%)の「b1 印象」や同じく7回(1.3%)の「b2 嗜好」、5回(0.9%)の「b3 激励」等の指摘が各小タイプの中では目立ち、子ども達は自身の通う(通っていた)小学校から、「頑張ろうと思う」等の精神的利益を享受する傾向にあることが伺えた。

しかしながら、その他の視対象と景観認識タイプの関係におい

表-4 景観認識タイプと、「シーン景観」の視対象及び「場の景観」との関係

景観認識タイプ	種類	小タイプ	代表例	「シーン景観」											「場の景観」										指摘回数(割合)		
				視対象											「場の景観」												
				「ゆるぎの里山」	「Y小学校」	「めぐみが丘」	「桜」	「富士山」	「大山」	「湘南平」	「江の島」	「海」	「平塚市街」	「日向岡」	「初日の出」	その他	「めぐみが丘公園」	「公所公園」	「八幡神社」(上吉沢)	「八幡神社」(下吉沢)	「延命寺」	「霧降りの滝」	「吉沢の池」	「立石」		その他	
A 見え方	a1 審美	・きれいな・美しい	3	21	2	34	27	7	2	2	1	2	2	2	2	5	2	3	4	2	1	20	1			2	145(26.5%)
	a2 魅力	・格別だから・迫力がある		2		1	3														3					9(1.6%)	
	a3 調和	・周囲の風景に似合う・相性がいい		4		4	4																			16(2.9%)	
	a4 色調	・キラキラしている・色とどりになる	1			1	2	1														5				11(2.0%)	
	a5 比喩	・桜が学校を囲んでいるかのよう		1		3																				4(0.7%)	
B 心象	b1 印象	・感動する・心に響く		7		4	1	2	1			1	1		1	1								1		23(4.2%)	
	b2 安心	・ほっとする・落ち着く・やさしい気持ちになる	1	2		2	1				1						4	1	1		1	2				16(2.9%)	
	b3 快適	・気持ちいい・涼しく感じる			1	1				1	1										9		1			15(2.7%)	
	b4 嗜好	・大好きだから・いいと思った		7	3	4	5	1	1			1					2	2	1		2	2				29(5.3%)	
	b5 季節感	・春が来たと思う・入学や進学を感じさせる	1	2		7	2		1		1	1			1	1	1				1					18(3.2%)	
	b6 激励	・今日も頑張ろうと思う・悩み事が消えてしまう		5		4	1	1			1															13(2.4%)	
	b7 慰安	・癒される・やさしい気持ちになれる		1		2	1	1								1							1			7(1.3%)	
	b8 懐古	・懐かしと思う・思い出の場所				1			2			1	1													9(1.6%)	
	b9 神聖	・神聖な気持ちにしてくれる・幻想的															1	2	1		1					5(0.9%)	
	b10 自然	・自然を感じる・自然を味わえる		1	1		1	1									2		1	3			1			11(2.0%)	
	b11 願望	・花見がしたいと思う・残って欲しい				1	1																			3(0.5%)	
C 地域紹介	D 音	・富士山を見てほしい・ハイキングコースにおすすめ		2		2	4								1	2						3		1		15(2.7%)	
		・音がきれい・とても静か		1		1			1								2			1	4	1				15(2.7%)	
E 事象	e1 視覚的要因	・富士山が見える・遠る物がない		11	2	8	12	4	3	3	2	3	1	1	1		1		1		1			2		55(10.0%)	
	e2 自然的要因	・自然に囲まれている・みどりがたくさんある		10		17	5				3						1	1	2	2		19	4	1		65(11.9%)	
	e3 社会的要因	・富士山は世界遺産・花見をする人がたくさん		8		5	6										3	2	2	2				1	1	30(5.5%)	
F 経験・習慣	f1 経験	・小さい頃よく行った・ごはんを食べた		1		5											1		4		1	3				15(2.7%)	
	f2 習慣	・登校時に見ている・よく遊ぶ場所		2		1	1	2			1														1	12(2.2%)	
		その他																						1		6(1.0%)	
指摘回数(割合)				6	89	10	107	77	20	12	12	7	9	2	9	12	19	14	25	9	6	42	7	6	7	547(100%)	
				(1.0%)	(16.3%)	(1.8%)	(19.6%)	(14.1%)	(3.7%)	(2.2%)	(2.2%)	(1.3%)	(1.8%)	(0.3%)	(1.6%)	(2.2%)	(3.5%)	(2.6%)	(4.6%)	(1.8%)	(1.0%)	(15.0%)	(1.3%)	(1.0%)	(1.3%)		

て、顕著な傾向は認められなかった。

次に景観認識タイプと「場の景観」の関係では、「霧降りの滝」が、20回(3.7%)の「a1 審美」と共に、「自然に囲まれている」「沢蟹がいる」等19回(3.5%)の「e1 自然的要因」の指摘が多かった。滝自体の美しさに加え、滝周囲の自然環境が子ども達にとって重要であることが判明した。

また、「b9 神聖」の指摘回数は合わせて5回(0.9%)で、その内の4回(0.7%)が「八剣神社」(上吉沢)等社寺の「場の景観」であったこと、めぐみが丘公園等公園の「場の景観」では「A 見え方」よりも「B 心象」の方が多く、場所の性質によって景観認識に差が見受けられるケースがあった。

6. まとめ

本研究では、吉沢地区周辺に居住する子ども達が、「吉沢八景選定プロジェクト」において、どのような景観をどのような認識に基づいて応募したのか、応募景観の記述から把握を図り、都市近郊の里地里山地域における子ども達の景観認識を探った。

子ども達は生活景観の中から、一般社会からも認識される「桜」「富士山」や、ランドマークとして認識されやすい「Y 小学校」、地区の象徴として考えられる「霧降りの滝」の景観を八景としてよく応募することが分かった。それらの景観に対し、見た目の美しさを指摘するだけでなく、存在自体や周囲の自然について言及するなど、景観認識に多様性が見られた。特に赤い屋根が特徴の「Y 小学校」は、心象に働きかけられた記述が多く、視対象としても視点場としても子ども達にとって重要な場所であることが判明した。今後、地域の小学校をランドマークとして認識しやすいデザインにしたり、小学校を中心とする景観軸を整備することが、子ども達の景観認識を際立たせるために重要であると考えられる。

また Y 小学校に加え、主な居住地である「めぐみが丘」やその敷地内にある複数の街区公園からの景観が全体の半数以上を占め、生活環境に関わり深い場所からの景観を重視する傾向が見られた。一方、「視点場と視対象」の記述から、地区内に多く点在する農地や里山を挙げる応募景観は少なく、里地里山に対する相対的な関心の低さが示唆された。しかし「視点場と視対象」の欄ではなく「推薦理由」の欄から、応募景観の状態・状況を補足的に説明す

る「e2 自然的要因」の景観認識タイプがみられることから、子ども達は二次自然である里地里山を、「自然」や「みどり」など漠然とした概念で認識している可能性が考えられた。今後は、人の手が継続的に加わることで形成される里地里山の特徴を理解させることが、里地里山保全の観点からは必要と考える。今回の「吉沢八景選定プロジェクト」では、子ども達から応募の少なかった里地里山の景観が2景選定された。以上の通り「吉沢八景選定プロジェクト」は、子ども達に里地里山を用いた景観まちづくりの重要性を啓発することに繋がり、同時に里地里山保全に対する関心や理解を高めさせる一手段として期待される。

謝辞：本研究は、「湘南ひらつか・ゆるぎ地区活性化に向けた協議会」を始め多くの関係者の方々からご支援を賜りました。なお、研究の一部は、「東海大学 To-Collabo プログラム(『平成25年度地(知)の拠点整備事業』採択事業)」として実施したものです。

引用文献

- 1) 大石洋之・村川三郎・西名大作(2007)：選好景観に対する被験者の心理的評価に関する分析：日本建築学会環境系論文集第618号、101-108
- 2) 大平和弘・上田萌子・藤本真里・田原直樹・赤澤宏樹(2016)：兵庫県三田市田城下町の景観形成に向けた景観資源の分布と居住者の認識との関係：ランドスケープ研究79(5)、671-676
- 3) 松島洋介・奥敬一・深岡加津枝・堀内美緒・森本幸裕(2008)：琵琶湖西岸の里山地域における地元住民と移入住民の景観認識の比較：ランドスケープ研究71(5)、741-746
- 4) 奥敬一(2010)：現代の里山をめぐる背景の変化：ランドスケープ研究74(2)、82-85
- 5) 鄂芳尊・建部謙治(2014)：子どもの心象風景に関する研究—瀬戸市児童の意識の移り変わり—：日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、537-538
- 6) 曲田清維(1992)：子ども達の町並み景観認識に関する研究—内子町八日市園地地区の評価を通して—：愛媛大学教育学部紀要教育科学第38巻第2号、211-220
- 7) 服部雄介・崎山俊雄・渡辺真季(2014)：小中学生にみる都市の想起場所と年齢との相関関係について—心象風景の形成過程に関する基礎的研究—：日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、565-566
- 8) 木下勇・中本攷(1993)：児童の風景描写からみた農村景観への意識化に関する基礎的研究：造園雑誌56(5)、211-216
- 9) 寺本潔(1984)：子どもの知覚環境の発達に関する基礎的研究—熊本県阿蘇谷の場合—：地理学評論57(Ser.A)-2、89-109
- 10) 青木陽二・楠原映子編(2007)：八景の分布と最近の研究動向—過去の景観評価データ—：独立行政法人国土環境研究所、12-16
- 11) 篠原修(1982)：新体系土木工学59 土木景観計画：技報堂出版、19-33